

ダイバーシティリレーエッセイ～様々なひとの多様な視点～

誰がための多様性

For whom diversity exists

新野 拓

読者の皆様は、“多様性”と聞いたとき何を思うだろうか。社会において推進すべきものと肯定的に捉える一方で、その時流に少しばかり息苦しさをを感じる方もいるはずだ。

実は私も、多様性の推進に賛同する一方で、誤解を恐れずに言えば、どこか小さな違和感のようなものも感じていた。この違和感を話の出発点にしてみたい。

日常を振り返ってみると、違和感のあるシーンは二つに絞られた。一つは、根拠が抜け落ちたまま「多様性は絶対的な善である」とする無批判な推進論に触れたとき。もう一つは、「多様性の観点で日本は欧米に遅れている」という主張に隠れた、「欧米は先進的だから追いつくべきだ」という進化主義的前提に触れたときである。つまり違和感の正体は、多様性そのものではなく、推進する理由づけに起因していたのだ。

では、どんな理由づけならば腑に落ちるのか。少し考えてみたい。進化主義が肌に合わないなら、「私たちには独自の文化があり、それには意味がある」という機能主義的なアプローチならどうだろう。いや、それでは「今のままでいい」という現状肯定に陥り、自らを変革するモチベーションは生まれにくい。社会全体が多様であることを良しとするマクロな多様性の視点だけでは、自分たちが変わらなければならない、というミクロな多様性の必然性が欠落してしまうのだ。

その欠落を埋めるためには、もっと生々しく、自分事として考えるべきなのかもしれない。「自分たちの競争力を高める戦略的メリットがあるから」で良いのではないか。そうか、多様性は結局のところ、「自分たちのために」推進するのだ。この言わば利己的な多様性を肯定していいのではないか、という思案に至ったとき、少し霧が晴れてきたように感じた。

思えば、私が多様性を肯定的に捉えているのも、大学院時代にスイスで2か月間研究した経験に基づくように思う。馴染みのない土地、初めて会う人々、母国語を使えない環境。苦労も多かったが、人種や専門領域の壁を越えて金属材料について議論した時間は、私の研究者としての引き出しを確実に増やしてくれた。そこでは、私も多様性の一部だったのだ。

読者の皆様にとって、多様性を取り入れるメリットとは何だろうか。社会の流れだからではなく、自分たちを強くする武器として多様性に向き合うことで、私たちの業界は更に面白くなるように思う。「多様性は正しい」という建前を一度横に置き、自分たちがより良い方向に進めるか、について本音で議論してみるのも面白いのではないだろうか。

介護と育児を通じて得た視点

Having experienced both caregiving and childcare

水林 舞

多様性がなぜ必要なのか。そもそも人は、生まれた国や地域、性別、家庭環境、受けてきた教育や出会ってきた人など、あらゆる経験が異なる存在であり、本来的に多様です。同じような属性や価値観の人だけが集まれば、問いの立て方やアプローチが知らず知らずのうちに偏り、見えてくる解決策も限られてしまいます。複雑で変化の激しい社会のなかで課題を発見し、共有し、適切に向き合っていくためには、多様な視点の存在が欠かせないと感じます。

一方で、多様性は教育、家庭、企業などさまざまな場面において、十分に活かされているとは言えません。役割や期待が無意識のうちに固定化され、異なる背景や事情をもつ人の声が見えにくくなることがあります。私自身も以前は、多様性という言葉はどこか理想的で、自分とは少し距離のある概念として捉えていました。

しかし、家族の介護と育児が重なった時期、その認識は少しずつ変わっていきました。介護では、昨日できたことが今日はできないという現実に向き合い、戸惑いや苛立ち、自分の心の余裕のなさ気づかされました。それでも、ふとした笑顔や「ありがとう」という言葉に触れるたび、気持ちが静かにほだけていくのを感じました。亡き実父と過ごした時間や会話は、今も心の支えになっています。

育児においても、予測できない行動や夜泣きに向き合うなかで、「どうして自分だけが」と感じてしまう瞬間がありました。それでも、小さな手で抱きついてくるその温もりに触れると、張りつめていた気持ちが和らいでいきます。また、自分が育ててきた子どもであっても、生き方や価値観は異なるという事実気づき、“子育ては自分育て”という言葉の意味を実感しました。

こうした経験を通して、人はそれぞれ異なる状況を抱え、異なる速度で生きているのだと実感するようになりました。その違いは決して特別なものではなく、本来尊重されるべきものである一方で、ときに見過ごされてしまうこともあります。だからこそ、多様性は自然に存在するだけでなく、意識して守り、活かしていくことが必要なのだと思います。今では、異なる意見に出会ったときの戸惑いや揺らぎも、新しい視点に出会うきっかけだと前向きに捉えられるようになりました。多様性とは単に違いを受け入れることではなく、その違いに向き合いながら、少しずつ理解を深めていく営みそのものなのだと感じています。この実感大切に、多様な人が安心して力を発揮できる環境づくりに、これからも関わっていきたいと考えています。